

音楽の散歩道 その10の3

— ベートーヴェンの「第9」200年記念 —

ベートーヴェン弾き, ワーグナー

| キラメキテラスヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志
 | 大海・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

はじめに

音楽史上、ベートーヴェンと音楽的に関係の深い音楽家は、リストをおいて他にいない。ベートーヴェンの「交響曲第9番」200年記念の本シリーズでは、ベートーヴェンの全9曲の交響曲のリストによるピアノ編曲版について書く事が目的である。

然しそれだけでは物足りないので、あちこち脇道にそれている。

それは、ベートーヴェンが偉大な音楽家であり、興味が尽きないからである。

今回も若干寄り道して、数名の「ベートーヴェン弾き」のピアニストと、それに関連した四方山話を述べると共に、「第9」好きのワーグナーの歴史に関し述べ、更に、彼が編曲したベートーヴェンの「第9」についても言及する。

Part 5 ベートーヴェン弾きピアニスト

多くの作曲家達の中でも、ベートーヴェンは特に重要な地位を占め、現在でもクラシック音楽の中核をなす。

11月号で述べたが、彼の作品は、録音技術が確立した初期より、積極的に録音されてきた。ここではまず、ベートーヴェンのPソナタとP協奏曲について述べる。

録音は、主に20世紀のものである。

さて、ベートーヴェンのPソナタとP協

奏曲の録音を初めて完成させたピアニストは誰であろうか？その人の名は、アルトゥール・シュナーベル（1882-1951）である。

彼は、当時のオーストリア領（現・ポーランドのリプニク）に生まれた。

ウィーンでは、チェルニーの弟子の名教師レシエティツキにもピアノを学んだ。

レシエティツキは、リストより約20歳若い、リストと双璧をなすピアノ教師であり、ドイツ派の多くの名ピアニストを育てた。

レシエティツキも又、リスト同様、ベートーヴェンの孫弟子である。

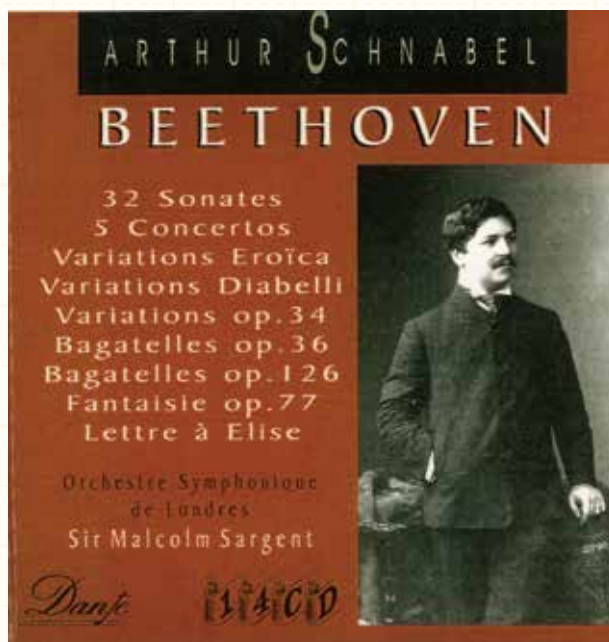


図26 シュナーベル:世界初のピアノ・ソナタ全集、ピアノ協奏曲全集の録音(1935)

ウィーンからベルリンに居を移したアルトゥールは、フルトヴェングラーなどとも共演したし、27年には7夜に亘り、ベートーヴェンのPソナタ32曲の全曲演奏を行い、

「ベートーヴェン弾き」として名声を博すようになり、独自の演奏スタイルを確立した。

そして、1932年1月～35年12月の3年をかけて、英HMV社よりSPレコード82枚から成る、Pソナタ全集を完成させた。更にそれと並行して、32年3月～35年4月にかけて、ロンドン響と共に、全5曲のP協奏曲全集を完成させた（図26）。

（第1番～第4番は、マルコム・サージェント、第5番は、アルセオ・ガリエラ指揮）

これは、ベートーヴェンのピアノ作品の演奏史、録音史を飾る金字塔であり、ベートーヴェンのピアノ演奏の1つの規範が確立された事となった。

図26は、シュナーベルによるベートーヴェンのP作品集（14CD）である（ダンテ社、©1998）。

ただ、音質や演奏技術に拘る人は、古い時代の録音は聴かない方がよい。

それらを期待する事は無駄である。

歴史的価値が重要なのである。

（一休み）飛行機の発達

私の中学、高校の6年間は、音楽、飛行機への興味とそのプラモデル作り、切手集めとSF小説で終わった。

ここでは、飛行機の発達年代の歴史をごく簡単に辿ると共に、15歳の私の一瞬を振り返ってみたい。音楽の録音と比べてほしい。

1903年、ライト兄弟はキティホークで、12馬力のエンジンを積んだ「フライヤー」で4回の飛行に成功した。

1回目、12秒・37m、4回目、59秒・259mであった。動力飛行機による世界初飛行の成果が上記の記録である。

この時、決定的な証拠が残されたが、それは、飛行中の鮮明な写真が撮られ残された事である。口でいくら説明しても誰も信用しなかっただろう。

シュナーベルの録音にも、これが当てはま

る。作曲家の場合は、楽譜である。

第2次大戦中には、飛行機は長足の進歩を遂げ、大空を自在に飛べるようになり、「レッド・バロン」ことエディ・リッケンバックやマンフレート・フォン・リヒトホーフエンなど、数多くのエース・パイロットが生まれた。

27年、リンドバーグがニューヨーク・パリ間の大西洋単独無着陸横断飛行に成功。

35年、巡行速度345km/時、21人乗りのダグラスDC-3が初飛行。丁度、シュナーベルの録音が完成した年である。

69年、アームストロングとオールドリンがアポロ11号の月着陸船で月面に降り立った。私達は、その様子をテレビの変な日本語アクセントの同時通訳の男性による生々しい実況中継で見守った。

この年、ボーイング747旅客機「ジャンボ」と英仏合作、高度2万mをマッハ2.2で巡行する超音速旅客機コンコルドが初飛行した。今から55年も前の事であった。

私達が東京に行くのも、海外に行くのも全てジャンボであり、大変お世話になった。

81年には、スペース・シャトルが打ち上げられた。現在より、日本人が、日本が生き生きしていた時代だった。

図27、28は、64（昭和39）年、中学3年の時の写真である。60年前である。短い頭髪が中学生、高校生は坊主刈りであった。

図の複葉機が、「フライヤー、キティーホーク」。ライト兄弟の弟のオーヴィルが、下の翼に腹這いになって操縦していた。

三角翼の飛行機がコンコルド。今、見返すと、USAF（米空軍）の文字と米空軍のマークのデカールが貼られているのが不思議である。米空軍が使用していた記憶がない。

米第7艦隊の空母の写真で、向こうの陸地中央あたりが我が家。通常、第7艦隊は空母

1, 駆逐艦3, 潜水艦1の5艦で編隊を組んでいた(図28)。



図27 プラモデルに熱中していた中学3年の私
右下はスペース・シャトルの原型(スペース・パッセンジャー)(1964, 昭和39年)

前日に、潜水艦が別府湾に姿を現し、翌日に駆逐艦に守られた空母が姿を現し、3日くらい停泊する。夜のイルミネーションがきれいだった。同じ光景を4年間眺めたが、同64年8月のトンキン湾事件を契機に、ベトナム戦争が勃発し、以後、この光景が見られる事はなかった。現在も同様の空しい戦争が地上で続いている。

図27, 私の右側が、スペース・シャトルの原型(構想中)で、当時「スペース・パッセンジャー」と呼ばれていた。シャトル打ち上げの17年も前の事である。

ただ、スペース・シャトルの飛んだ1980年代以降、新幹線にしる、航空機にしる、音楽にしる、各種娯楽にしる、日常生活で当時に比し現在、何か良くなったものがあるか、と言われれば、私にとっては、何もない。

戦争は未だに続いており、2024年11月の時点では、ますますの戦争拡大の懸念さえ生じている。一刻も早い戦争の終結を願うばかりである。

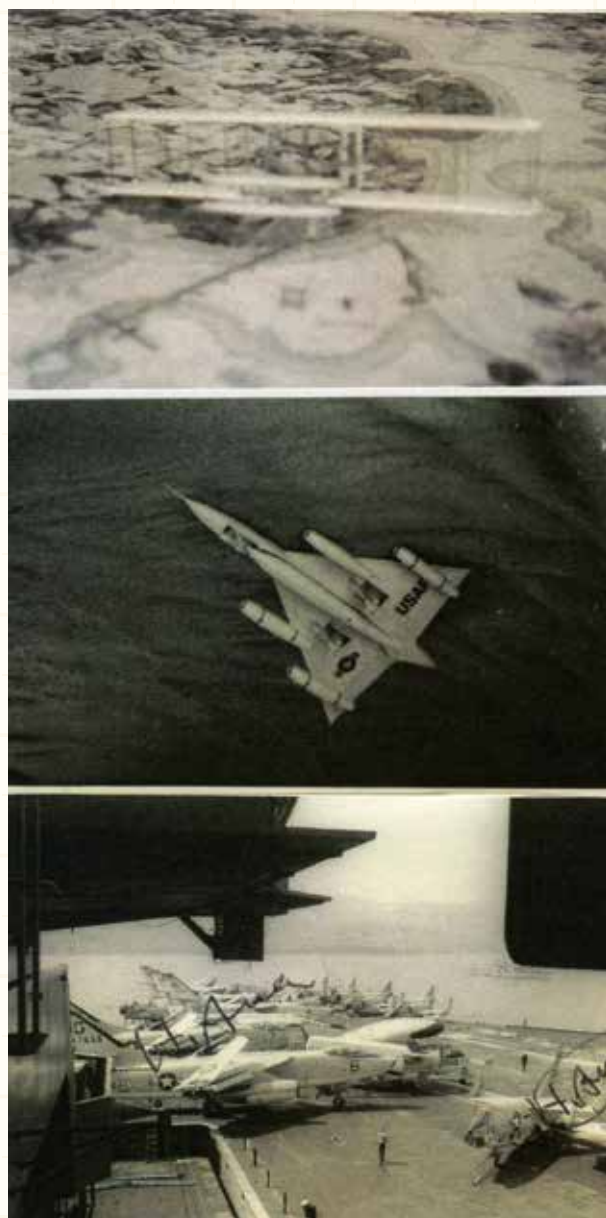


図28 上:ライト兄弟の「フライヤー」
中:超音速機コンコルド
下:米第7艦隊の空母
陸の中央あたりが我が家(1964)

<付録> HMV, EMIの名プロデューサー, ウォルター・レッグ

英国のEMI傘下, HMVのウォルター・レッグは1931年に、レコード製作, 販売の画期的方法を考案した。

売れるかどうか分からないレコード製作のリスクを避けるため, 1つのレコード毎に「協会」を創り, レコード製作を企画し, 世界中に購入者を募り, 一定数が集まればレコードを製作するというものであった。

1932年の第1回, 「ヴォルフ歌曲集」の

「ヴォルフ協会」の場合、500人に対し、日本人は111人であったと言われ、当時の日本人のクラシック音楽に対する関心の高さが窺われる。今の日本人で、彼の名を知る人など皆無であろう。そのシリーズの一環として、シュナーベルのPソナタ全集などが生まれた。

映画同様、レコード製作でもプロデューサーの力量が最重要なのである。

プロデューサーは、演奏曲目と演奏者を決定する。日本のように、国内生産だけで十分にやっつけていける場合とは、全く異なる。

世界戦略であり、世界中で売らねばならない。そのためメジャー・レーベルが、世界に何社かあるが、そのレコードであれば、レベルは保たれている、と考えられる。

ただ、メジャー・レーベル名でも、その国だけで名のある演奏者の、一国内限定製作のものもあるので、混同しないよう注意が必要である。



図29 プッチーニ「蝶々夫人」(1955)
プロデューサー:ウォルター・レグ
カラヤン, カラス

有能なウォルター・レグは、1945年には、フィルハーモニア管弦楽団も創設。

カラヤン、カラス、シュワルツコップなどと共に、歴史的な名盤を多く遺した（カラヤンは、54年のフルトヴェングラーの死去に伴い、

55年にベルリン・フィルに移り、56年には、ウィーン国立歌劇場の芸術監督にも就任したため、レコード会社がDGに移った。53年にウォルターは、シュワルツコップと結婚した）。

55年のカラヤン指揮、ミラノ・スカラ座の「蝶々夫人」のタイトル・ロール、カラスの歌うアリア「ある晴れた日に」の歌唱は、圧倒的である（図29）。



図30 プッチーニ「トゥーランドット」(1957)
プロデューサー:ウォルター・レグ
カラス, シュワルツコップ

57年のミラノ・スカラ座でのセラフィン指揮、「トゥーランドット」のタイトル・ロール、カラスの歌うアリア「この宮殿の中で、In questa Reggia」の歌唱も圧倒的である。リユー役はシュワルツコップ。

ちなみにオペラのアリアには、作曲者の付けた名前はない。アリアの歌い出しの歌詞がそのまま、アリアの通称となっている。

上記2作とも、プロデューサーは、ウォル

ターであるが、必ずプロデューサー名が記されている（図 30 の下から 2 行目、赤で示す）。

図 29, 30 の 2 つのボックス表紙の左上の犬が HMV のアイコンである。

このアイコンについては、多くの人をご存知と思う。1889 年にフランシス・バラウドが描いたよく目にする絵である。

フォックス・テリア「ニッパー」が、ラッパ型スピーカーから流れる、亡き主人（フランシスの兄マーク）の声に、不思議そうに耳を傾けている様子を描いた、何となく心温まる絵である。

私達もこのような穏やかな気分で音楽に浸りたいものである。

「His Master's Voice」が HMV の社名の由来である（図 30 右下に拡大図）。

さて、シュナーベル以後、歴史に名を残したピアニストの大部分が「ベートーヴェン弾き」であると言って過言ではない（コルトー、ホロヴィッツは除く）。

シュナーベルと同世代のピアニストを生年順（1877-87 の 10 年間）に列挙すると、コルトー、シュナーベル、バックハウス、エドウィン・フィッシャー、ルービンシュタインが挙げられ、90 年代のギーゼキング、ケンプ、2000 年代のゼルキン、ホロヴィッツとなる。

ルービンシュタインに至っては、3 回目の P 協奏曲全集を、バレンボイム指揮、ロンドン・フィルと共に、88 歳の時に完成させている。

これらのうち、名実共に最初の偉大な「ベートーヴェン弾き」は、バックハウスである。

音楽の友社の「不滅の巨匠達」の 5 人の内の一人に選ばれている。妥当である。

ライプチヒ生まれのバックハウス（1884-1969）は、リスト門下のオイゲン・ダルベールの弟子である。

彼の演奏は、高度な技巧に支えられ、豪快でスケールの大きいもので、SP 時代から「鍵

盤の獅子王」と呼ばれた。

彼は、2 つの P ソナタ全集を遺した。

1 回目はモノラル盤、2 回目はステレオ盤であるが、69 年、演奏会でベートーヴェンの P ソナタ第 18 番の演奏中、心臓発作を起こした。一時中断して再開したが、1 週間後に死去した。

このため、2 回目のステレオ盤全集で第 29 番は未完となった。

イッセルシュテットとの P 協奏曲全集（1958-59）も遺した。

私の手元には、バックハウスの 1931 年 1 月 31 日のクイーンズ・ホールにおけるリサイタルの、サイン入りプログラムがあるので、それから演奏会の様子を想像できる。

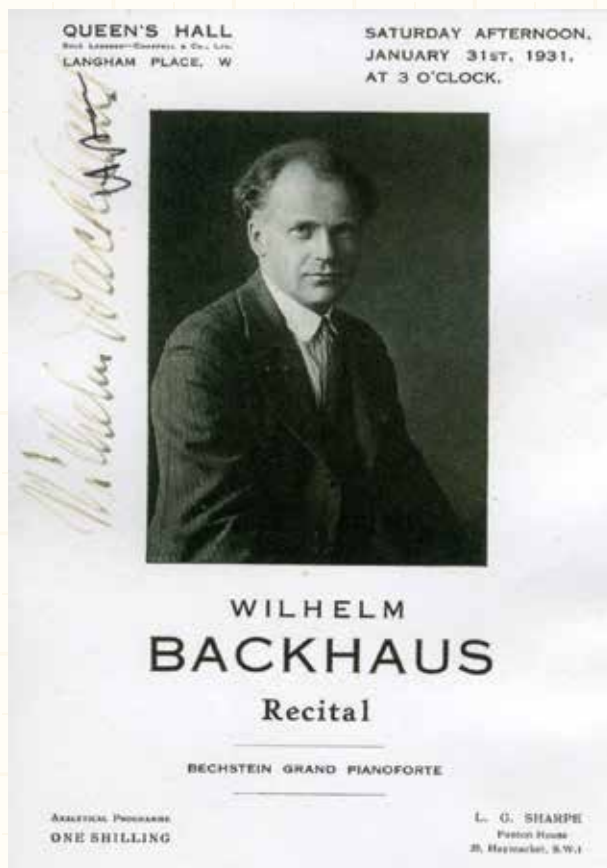


図31 バックハウス、1931年のリサイタル・プログラム

図 31 は、プログラムの表紙である。プログラムは、13 頁と厚い。

土曜日の午後 3 時開演で、使用ピアノはベヒシュタインのグランド・ピアノフォルテ。

図 32 は、プログラム 1 頁目である。

リサイタル後、楽屋でサインをもらった、という筆跡と、その右側に書かれた自身のサインから、このプログラムの持ち主が、教養ある人物であると知る事ができる。

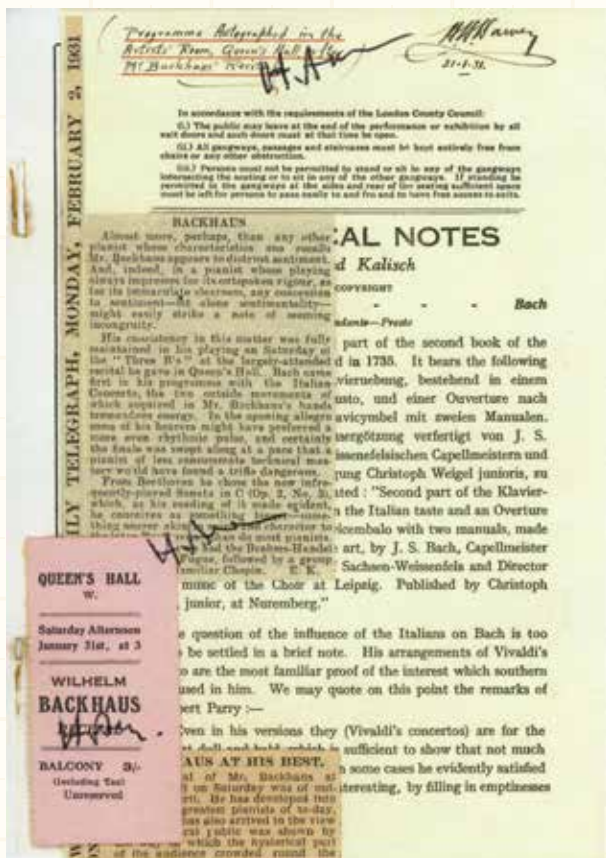


図32 プログラム1頁目
新聞の切り抜きとチケット

丁寧に取り取られた2月2日、月曜日の新聞、ザ・ディリー・テレグラフとニュース・クロニクルの評が貼り付けられている事、バルコニーの自由席の半券も残されている事から、几帳面な性格も読みとれる。

彼のような性格は、コレクターとしては最適で、このプログラムもコレクションとして遺されたのだろう。

新聞には、この日のバックハウスが絶好調だった事、熱狂的観客が、舞台際まで押し寄せた様子や、演奏に関しては、驚異的エネルギー、感傷の破壊などの表現を用い、簡潔にまとめられている。

演目に関しては「Three B's」と多少とも聴き慣れたショパンが演奏された、とある。

3 B'sとは3大B、即ちバッハ、ベートーヴェン、ブラームスの3人の事で、各々、バロック、古典派、ロマン派を代表する伝統的ドイツの音楽家で、ハンス・フォン・ビューローの有名な造語である。

実際のプログラムを見ると、バッハの「イタリア協奏曲」、ベートーヴェンの「Pソナタ第3番」、ブラームスの「ヘンデル主題による変奏曲とフーガ」それにショパンの練習曲、バラード、ワルツなど小曲が6曲に加え、ショパンのP協奏曲第1番からのバックハウス編曲（ロマンス）となっている。

このプログラムを一見すれば、彼が客を満足させるリサイタルを行っていた事が分かる。曲の解説も小曲まで詳細で親切である。

アンコールの4曲もペン書きされている。

Black-Notes Study, Sérénade “Don Juan”, Barceuse, Liebestraum とショパンとリストの小品で締めくくられている。

3 B'sで満腹、満足したあとショパンで消化され、薄暗く冷たい、真冬の道を軽い足取りで帰り、我が家で暖かい夕食という光景が目浮かぶ。

バックハウスは堅いばかりの人間と思っていたが、このプログラムを見て、彼に対する印象がガラッと変わった。

シュナーベル以後、20世紀にPソナタ、P協奏曲全集を完成させたピアニストは数多いが、逆に2回目のバックハウスのように、完成させられなかったピアニストもいる。

音楽好きが、最初に思い浮かべるのが、ロンドン生まれのカットナー・ソロモン（1902-1988）であろう。年齢的には、ゼルキンより1歳年上である。

クララ・シューマンの孫弟子に当たる彼は、何と8歳で「チャイコフスキーのP協奏曲第1番」でデビューするという驚異的才能を示した。「神童ソロモン」の呼称は、彼にだけは許され

ると思う。教育システムが整った1971年生まれ
のキーシンでさえ、10歳のデビュー曲は、モ
ーツァルトの「P協奏曲第20番」である。

9歳の時には、バッキンガム宮殿で、御前
演奏を行った。

ソロモンは、EMIで1951年からPソナタ
の録音を開始したが、56年に脳梗塞で左片
麻痺を来し、ピアニスト生命を絶たれた。非
常に悔やまれる事である。

結局、48年の第3番（SP盤）から、56年
の第7、27番（ステレオ盤）まで、全18曲
が録音され、EMIからリリースされた。



図33 ソロモンの遺したピアノ・ソナタ集



図34 ソロモンの遺したピアノ協奏曲全集

図33には、その全曲が記されている。
然し、P協奏曲全集は完成した。指揮者は

クリュイタンスほかであった（図34）。

ソロモンは、然しグールドより長生きした。

カナダのトロント生まれのグレン・グー
ルド（1932-82）は、脳出血で50歳で死去した。

グレンほど音楽界に話題と衝撃を与え続
けた現代のピアニストはいない。

彼はベートーヴェンの「P協奏曲第4番」
でデビューした。

彼を有名にしたのは、1955年のバッハの「
 Goldberg変奏曲」であるが、彼を20世紀以降、
最も偉大なピアニストにしたのは、自分の性
格を逆手に取り、演奏会では、弾き直しのき
かない「ノン・テイク・ツーネス」と決別し、「
コンサート・ドロップアウト」した事である。

彼の最後の公開演奏会は、64年3、4月の
シカゴでの演奏会であった。

公開演奏ではないとは言え、他の演奏家と
共演する事は、厳密に言えば、彼の意志に反
するようにも思えるし、逆に、文字通りに単
純に解釈すれば、彼の意志通りだと捉える事
もできるが、いずれにせよ彼は、1966年に、
ストコフスキー指揮アメリカ交響楽団と、「皇
帝」を録音している（図35）。

彼はこれで最終的に「P協奏曲」を完成させ
た。この全集だけは完成させたかったのだろう。

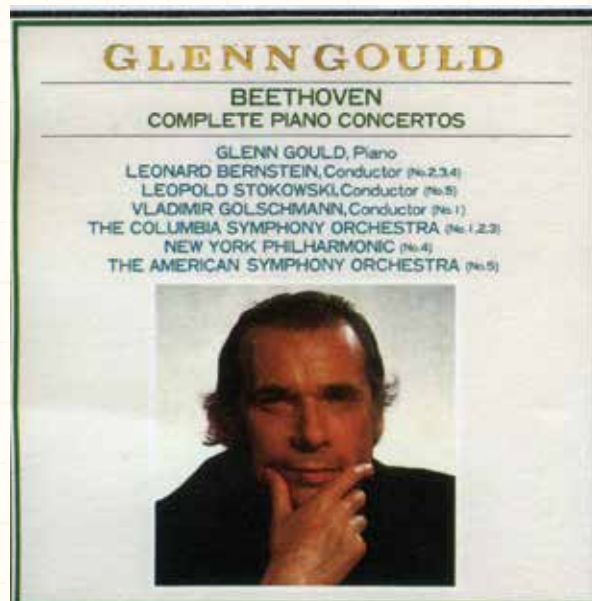


図35 グールドのピアノ協奏曲全集(1966)

「GLENN GOULD: CONCERT DROPOUT IN CONVERSATION WITH JOHN McCLURE」のLPは貴重である（図36）。



図36 グールド「コンサート・ドロップアウト」LP

さてアシュケナージ（37-）をみよう。

彼は、55年ショパン・コンクールで2位に入賞している。後年のアルゲリッチと同様に、彼の2位を不服としたミケランジェリが審査員を降りるといふ騒動が起こった。

その後、アシュケナージは、56年のエリザベート王妃、62年のチャイコフスキーの各コンクールで優勝し、彼の名前は広まった。

63年には、ロシアからイギリスに亡命し西側での音楽活動を行うようになった（74年には、夫人の母国アイルランド国籍を取得した）。

西側での彼の音楽活動は目覚ましく、70年に入ってから、私はその録音活動には驚くばかりであった。

彼は3回、P協奏曲全集を完成させた。

ここに示すのは、1回目のシカゴ響、ショルティ指揮のものである（©1973）（図37）。

亡命してから、約10年は経過し、ピアニストとしても世界のトップクラスであった。

図38は、録音スタジオの情景である。

この写真から、当時のピアニストと指揮者の関係がよく分かる。

図38上は、立ったままのショルティが、アシュ

ケナージにスコアを説明し、それをアシュケナージが熱心に聴き入っている場面である。

図38下は、重要である（私の想像）。



図37 ピアノ協奏曲全集
アシュケナージ、シオルティ、シカゴ響

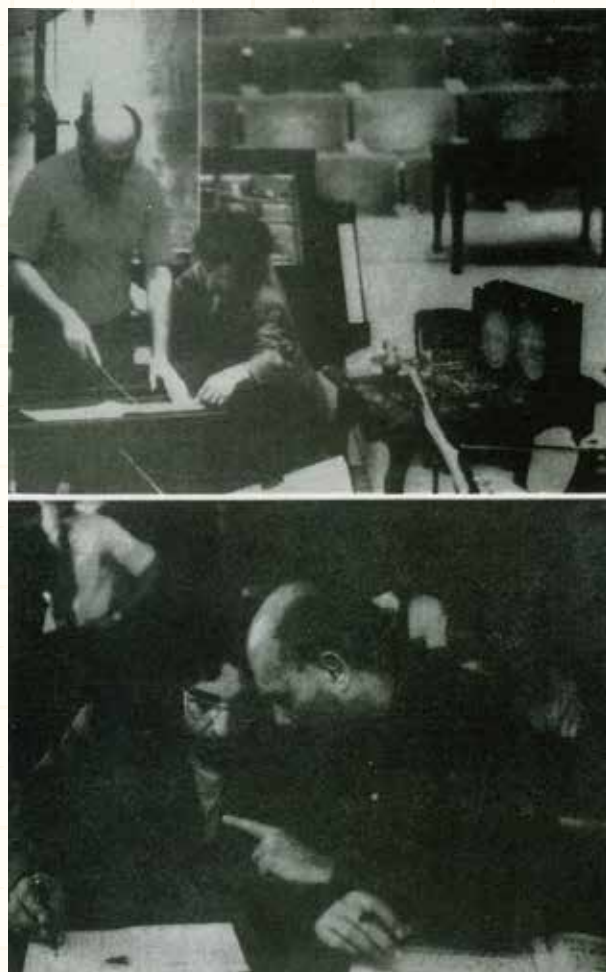


図38 録音スタジオ情景
上:アシュケナージへの説明
下:アシュケナージへの指示

ショルティは指差しながら、耳元でこうささやいているのだ。「いいかいアシケナー君、ここが重要な所だぞ、ここは、このように弾くんだよ、分かったね……」。それに答えて、アシケナーは真剣に耳を傾け、眼鏡を掛けた目で楽譜を追い、右手のペンでメモしているのである。このようにして、P協奏曲においては、実力ある指揮者からピアニストは学んでいくのだ。

ショルティ同様、フルトヴェングラー、トスカニーニ、カラヤン、バーンスタインなどは全員例外なく、音楽の基本であるピアノが達者であり、作曲もでき、多くはコンペティートルからの叩き上げである。

彼らは、本当に実力があつたのである。

現在そのような指揮者は、いなくなつてしまった。小粒になつたのだ。

強いて挙げれば、1991年にショルティから、シカゴ響を引き継いだ、バレンボイムぐらいであろう。

Part 6 ベートーヴェンの交響曲第9番 好きのリヒャルト・ワーグナー

1812年にナポレオンは、ロシア遠征で大敗を期し、さらに翌13年、ライプチヒの戦いで決定的敗北を期した。

この時、ザクセン王国第2の都市、このライプチヒで生まれた、生後5ヶ月の赤ん坊がいた。

リヒャルト・ワーグナー(1813-83)である。彼は、バッハゆかりの聖トマス教会で洗礼を受けた。

1830年、17歳のリヒャルトは、洗礼を受けた聖トマス教会付属のトマス学校に転校する事ができた。

トマス学校は、プロテスタント・ルター派の学校で、「ラテン語」「宗教教育」「音楽」を三昧一体として教育するのを目的としている。

教会には音楽が必須であり、その音楽内容

は「教会カンタータ」「モテット」「ミサ曲」「コラール」であり、それを演奏するオルガン、オーケストラ、合唱等を学ぶのだ。

17歳のリヒャルトは、この年、ベートーヴェンの「第9」の総譜を写譜すると共に、それを、独奏ピアノ用に編曲した(図39)。

彼はそれをベートーヴェン自身の「荘厳ミサ」と「第9」の出版社であるショット社に送り、出版を依頼したが断られている。



図39 ワーグナー編曲の第9
ピアノ:小川典子
合唱:バッハ・コレジウム・ジャパン
(資料的価値は高い)

図39は、ワーグナーによる「第9」のピアノ編曲版。小川典子のピアノ、バッハ・コレジウム・ジャパンの合唱、1998年世界初録音。小川は立派である(顔写真付)。

2年後に彼は、再度送り、その見返りに、「荘厳ミサ」の総譜のピアノ編曲版を希望したが、無視されて、そのままになったようである。出版社にとっては、魅力がなかったのだろう。実際、「第9」は、当時からよく演奏されて

おり、合唱付きのピアノ曲を家庭で楽しむのも、ほぼ不可能であった事は想像に難くない。あまり意味の無い作品であった。

後年、リヒャルトが有名になると、ショット社は、楽譜をリヒャルトに返却。ワーグナーの私邸「ヴァーンフリート」（後の記念館）に保管される事となった。

ワーグナーがベートーヴェンの「交響曲第9番、合唱付」を愛し、重要な折々に、この曲を指揮・演奏したのは、彼はこの曲が持つ厳粛かつ堂々とした壮大な音楽、そして合唱（声楽）の持つ圧倒的迫力の中に、彼にとっての音楽の究極の姿を感じ取っていたからに違いない。

それは、彼の音楽の根源となり、やがて声楽付きのドラマ、即ち、雄大なオペラ、楽劇として結実するのである。

彼の生み出した無限旋律は、永遠に流れ続けるのである。

（宗博）

1843年、ザクセン王国の首都・ドレスデンのザクセン宮廷歌劇場の指揮者に就任すると、オーケストラを訓練し、その演奏レベルの向上に努めたのである。

そして46年の「枝の主日」に「第9」を演奏し、彼の理想の音楽を肝に銘ずるため、毎年、この日に「第9」を演奏する習慣をつくったのである。

なお、「枝の主日」は、「受難の主日」とも言われ、復活祭直前の日曜日をさす。

72年、リヒャルト59歳の誕生日に挙行された「バイロイト祝祭劇場」の起工式で、礎石を3度打ち鳴らした日の夕方、辺境伯劇場

でリヒャルトは「第9」を指揮・演奏し、劇場の完成を祈念したのである。

「バイロイト祝祭劇場」のこけら落としは、76年で、26年の歳月をかけて、74年に完成した4連作「ニーベルングの指輪」で指揮はハンス・リヒターであった。

以来、ワーグナーの自作曲の10曲のみ上演する、ワーグナー専用の「バイロイト祝祭劇場」で、ベートーヴェンの「第9」のみが、例外的に演奏される唯一の曲となったのである。

かくして、本誌10月号で述べたように、フルトヴェングラーの「第9」が、1951年の第2次大戦後初の「復活バイロイト音楽祭」の初日を飾ったのである。

「第9」は、今日、最も親しまれ、最も多く演奏される交響曲となった。

本誌、「鹿児島市医報」12月号が出版される頃には、日本中で「第9」が演奏され、「歓喜の歌」の大合唱が、鳴り響いているだろう。

今年は、バーンスタイン、ウィーン・フィル、ギネス・ジョーンズを聴こう（図40）。

（つづく）



図40 バーンスタインの「第9」(1979) ウィーンフィル、ギネス・ジョーンズ